

平成 29 年 (2017 年) 7 月 29 日、30 日の 2 日間にわたって第 22 回日本口腔顔面痛学会学術大会が、第 30 回日本顎関節学会学術大会と共催で開催されました。2 日間にわたって総勢 900 名を超える研究者と臨床家が集い、参加者は新しい知見を基に活発な議論を行う大変有意義な 2 日間となりました。広報委員会委員長の小見山が 2 日間にわたる学会の様態をお届けします。

第 22 回日本口腔顔面痛学会学術大会参加報告



大会長 佐々木先生の開会式挨拶

印象的であったのは、侵害受容性疼痛、神経障害性疼痛と心因性疼痛を結ぶ慢性疼痛に関して、症状は局所だが中枢を含む全身疾患であるという中枢神経障害性疼痛という概念の提示、慢性痛患者の運動療法は適切な時間として 40 分程度

第 22 回日本口腔顔面痛学会学術大会 1 日目は、開会式での理事長兼大会長である東北大学歯学部の佐々木啓一先生の挨拶から始まった。

初日は顎関節学会との合同シンポジウムで「運動器疼痛の治療法としての運動療法」というテーマで始まった。座長は佐々木理事長と日本歯科医師会の高野直久先生が座長を務められ、まずは高野先生からフレイル等の運動障害に関するイントロダクションがあり、その後、基調講演として福島県立医科大学の矢吹省司先生から、テーマに沿った講演が行われた。その中で

印象的であったのは、侵害受容性疼痛、神経障害性疼痛と心因性疼痛を結ぶ慢性疼痛に関して、症状は局所だが中枢を含む全身疾患であるという中枢神経障害性疼痛という概念の提示、慢性痛患者の運動療法は適切な時間として 40 分程度の一定時間 (Active pacing) と定めることの重要性、発症から 1 か月の急性期は日常生活



佐々木先生と高野先生の座長風景

活に必要な運動は行い、慢性疼痛においては、痛みを増強するような運動は禁止とし、疼痛部位から最も遠位の運動から運動療法を開始すること、慢性疼痛は 3 か月ごとの経過観察で日常生活に支障がなければ痛みがあっても治癒と考えること、など数多くの口腔顔面痛の治療に反映できる示唆をいただいた。



超満員の合同シンポジウム会場

初日の午後には「神経障害性疼痛の臨床」のテーマでシンポジウムが開催された。和嶋浩一先生の座長で、最初に日本大学歯学部の篠田雅路先生が「三叉神経障害性疼痛の発症メカニズム」について、

神経障害性疼痛の基礎的知識について講演された。次いで日本大学歯学部の今村佳樹先生が「三叉神経領域の末梢性神経障害性疼痛の診断」として、現在提唱されている基本的な診断上の指針とその問題点について講演された。



神経障害性疼痛シンポジウムの座長の和嶋先生と演者の篠田先生



今村先生の講演風景



佐久間先生の講演風景

では腹を割って話ができる。普段なかなか質問できない先生方も気軽に質問に答えてくれる貴重な時間であるので、是非会員の皆様も積極的に参加して、楽しい時間を過ごされることをお勧めする。今回は2学会合同で、特に盛大な懇親会となった。

引き続いて、大阪歯科大学の佐久間泰司先生が、「神経障害性疼痛の治療」ということで、薬物療法を中心にその他の療法の重要性も含めて解説された。副作用判定としての心電図の判読は当たり前に行える必要があることや、プレガバリンを少なくとも4週は続けてから効果判定する等、数々の示唆にあふれる講演であった。

昼の臨床研究に関する一般口演や症例報告に関するポスター発表の熱いディスカッションも冷めやらぬ中で、初日終了後には、両学会合同の会員懇親会が横浜らしく重慶飯店で開催され、質問する時間がなかった参加者が演者に活発に質問をする姿が目についた。学会会場では議論つく

せない内容も、懇親会



会員懇親会の様子



一般口演座長の今村先生と佐久間先生

門では日本大学松戸歯学部の新山裕名先生と成田紀之先生、昭和大学歯学部の佐藤多美代先生にそれぞれポスター賞が授与された。

学術大会の最後には顎関節学会の開業医の会が主体となり、「顎関節症と関連する頭痛の診断と管理」という内容でイブニングセミナーが開催された。座長は開業医の和気裕之

二日目は、一般口演とポスター発表で活発な議論が行われた。一般口演

では症例報告や臨床研究で活発な議論が交わされ、ポスター発表では、臨床研究の発表で新しい知見に多くの質問が発せられていた。今回の学術大会においてもポスター賞が選考され、基礎部門では日本大学歯学部の古宮宏記先生と東京慈恵医科大学の小泉桃子

先生、臨床部



優秀ポスター賞の表彰風景

先生と佐藤

文明先生が務められた。演者としてまずは井川雅子先生が、「DC/TMD から考える頭痛に対する歯科医師の役割：「顎関節症による頭痛 (DC/TMD)」を正しく診断するために」という内容で、頭痛の重複診断を含めた内容を提示された。次いで島田淳先生が、「開業医における顎関節症・頭痛への対応」という内容で、開業医における頭痛を訴える患者に対する適切な対応を教示された。最後に日本大学松戸歯学部の牧山康秀先生が、脳神経外科出身の頭痛専門医という立場から、歯学部付属病院での頭痛外来の治療経験を基に講演された。外来で最も遭遇する緊張型頭痛と片頭痛の特徴とその対応、また歯科



イブニングセミナーでの牧山先生の講演風景

医師が臨床上注意すべき頭痛や顎関節症の共存症としての頭痛への注意について解説いただいた。このセミナーは学会の最後のプログラムであるにも関わらず、会場は満員立ち見の大盛況であり、口腔顔面痛学会の盛り上がりを期待させるプログラムとなった。

今回のように学術大会が他学会と共催であると、日頃の自分達の視点とは異なる発表に数多く触れることができる。新たな研究のきっかけや臨床のヒントを発見した先生も多くいらっしゃったのではないだろうか。来年の日本顎関節学会、日本歯科心身医学会との3学会での共催学術大会が楽しみである。